

平成 27 年度奈良市内における近世近代の歴史的建造物の掘り起こしによる地域活性化事業

平城地域歴史的建造物調査報告書

押熊・中山・山陵・秋篠・歌姫

平成 28 年 3 月

一般社団法人 奈良県建築士会

協力 奈良市教育委員会

目次

序

事業の概要	1
調査地域の概要	3
地域全体調査結果	5
各地域調査結果	
押熊	8
中山	14
山陵	20
秋篠	26
歌姫	32
報告会の記録	38

序

(一社)奈良県建築士会が平成 22 年以來育成してきた地域文化財建造物専門家(ヘリテージマネージャー)と奈良市文化財課の協働により、昨年の富雄地域 5 地区(石木、大和田、中、三碓、二名)に引き続き、本年は平城地域 5 地区(押熊、中山、山陵、秋篠、歌姫)における地域に根ざした歴史的建造物の掘り起こしのための調査を、延べ 56 名で 575 件において実施しました。

この平城地域の 5 地区は大正 3 年の大阪電気軌道(現近鉄奈良線)及び昭和 3 年の奈良電気鉄道(現近鉄京都線)の開通に伴い農村から住宅街への変遷があり、昭和 40 年代から宅地開発が進み、平城ニュータウンや登美ヶ丘団地が隣接するようになりました。

この地区は、農村であった旧集落にも住宅地が広がり、新興住宅が混在するようになっていますが、比較的昔からの町並みを残している地域でもあります。そして、今回の調査結果から、隣接しながらもそれぞれの地区が異なる様子を独自の特徴として近世近代と経年変化を重ねていることが読み取れます。

行政より事前に各調査地区の自治会長に協力を依頼し、地域住民周知のもと実施した調査は歴史、文化、伝統などについて地域住民による講話を聞く事前学習からはじまり、3 名 1 組の調査班が築 50 年以上経過する歴史的建造物の意匠形態における特徴を細かく捉えたものです。さらに、調査のみに留まるのではなく、結果の報告会を実施し、行政・住民とともに地域や建物について歴史的、建築的見地から一緒に考察する機会を設けたことにより、建物ひとつひとつは個人の財産であることはもとより、町の財産でもあるという認識ができるようになりました。そして、それらを「地域文化財」と位置づけ、守り続けていくことの大切さや、改築を行い、新しい建物に生まれ変わったとしても、地域の建築的特徴を残した伝統的な意匠・材料・工法を町という面的なスケールで、後世へと伝承していく意義を確認しあえたのではないかと思います。

その上で、その歴史的文化的建築的背景を理解したヘリテージマネージャーが、専門家としての役割を地域や個人に対して果たす責任は大きいと改めて自覚し、より一層の努力をしなければいけないと思います。

最後に、調査にご理解ご協力をいただいた住民のみなさまや、ご支援・ご指導いただいた奈良市文化財課専門職員の方々に感謝の意を表すところです。

一般社団法人 奈良県建築士会
会長 湊上 徳光

報告書刊行に寄せて

奈良市では、様々な調査の成果を基に、文化財保護を進めています。どこに、どんなものが、どれくらいあるかを把握することが、文化財保護の基礎となります。しかし、奈良市内にはたくさんの歴史的建造物があるため、未調査のものも多く残っています。

文化財保護の取り組みは、明治時代に始まりました。重要な文化財を「指定」して、現状の変更を厳しく制限する一方、修理工事等には手厚く助成し、その価値を厳密に保存していくしくみです。特に価値の高いものだけが指定され、その保護にたずさわるのも一部の専門家に限られてきました。

しかしながら、近年、保護の対象は大きく広がっています。「指定」制度は、大量の物件を扱うには不向きです。そこで、平成8年、一定の価値があるものを幅広く対象とする「登録」制度ができました。利活用を容易にするため現状変更の規制が緩い代わりに、手厚い助成はなく、所有者による自主的な保護に期待するしくみです。国が指定した建造物の数は約120年間で約4700棟ですが、登録の数は19年間で既に1万棟を越えています。

数が増えると、一部の専門家だけでは対応できません。地域に密着した人材が必要です。そこで、各地の建築士会を中心に、地域の歴史的建造物の保護を担う人材（ヘリテージマネージャー）の育成が進められています。奈良県建築士会も平成22年度から講習会を開いています。

こうした状況をふまえ、この度、奈良県建築士会と奈良市教育委員会とが協働して調査を行いました。その結果、本報告書のとおり大きな成果をあげることができました。お世話になった多くの皆様に感謝申し上げます。

この成果をどう活かすかは今後の課題です。教育委員会として登録や指定にも取り組んで参りたいと存じますが、行政が扱える範囲は限られています。したがって、この報告書を通じて、多くの方に平城地域の歴史的建造物の価値を再確認していただきたいと考えています。今回の調査が、地域の皆様、建築士会、学識経験者、行政等、それぞれがそれぞれの立場で文化財の保護に関わっていくきっかけになれば幸いです。

奈良市教育委員会 教育長 中室雄俊

事業の概要

[事業目的]

調査地の平城地域は奈良盆地の最北端に位置し、秋篠川の流域を中心に平城山丘陵と西ノ京丘陵を含めた地域である。かつては農村であったが、戦後宅地開発が進み、登美ヶ丘団地や平城ニュータウンが隣接するようになった。農村であった旧集落にも新興住宅が混在するようになっているが、比較的昔からの町並みを残している地域である。しかし、民家等の歴史的建造物の分布調査はほとんど行われておらず、地域特有の歴史的建造物の把握はあまり進んでいない状況である。

そこで、奈良県建築士会では、平成22年度から3年間で育成した地域文化財建造物専門家（ヘリテージマネージャー）の活動の一環として、奈良市教育委員会と協働し、平城地域の歴史的建造物の調査を行った。地域文化財の把握を促進し、その成果や分布状況を地域住民に報告、発信することで、地域文化財の認識が進み、まちづくりや地域の活性化に繋がる効果を期待し事業を実施した。

[期間] 平成27年7月～平成28年3月

奈良市教育委員会と協働協定書を交わし、役割及び責任を分担し、調査票や調査内容の検討を重ね現地の下見を行った後、調査を実施。

[場所] 奈良県奈良市平城地域（押熊、中山、山陵、秋篠、歌姫の5地区）

[調査対象] 近世近代の歴史的建造物（主に住宅を対象とし、社寺建築は除く）

[調査員] 地域文化財建造物専門家（ヘリテージマネージャー）、奈良市文化財課職員

[調査方法]

- ・各調査地区の自治会長に協力を依頼し、地域住民へ調査を周知。
- ・昭和36年(1961)と現在の空中写真を比較するなどして調査範囲を絞り込み。
- ・調査当日、かつての集落や暮らしの様子について地域住民から事前にヒアリング。
- ・概ね3名一組で外観からの目視により調査票へ記入。また、外観の写真を撮影。
- ・主屋、附属屋とも歴史的建造物（築50年以上）、中間的なもの（新しいが伝統的な意匠のもの）、非歴史的建造物に分類し、屋根形式、構造等を記入。加えて、規模、意匠、改造の有無などの特徴も記入。
- ・調査後、調査票を完成させ分布図を作成。

[情報発信] 調査終了後、主に地域住民に調査成果を報告する報告会を開催し、地域の特徴を報告。

[報告書作成] 調査の内容をまとめた報告書を作成し、今後の地域の資料とする。

地域文化財建造物専門家（ヘリテージマネージャー）について

奈良県内には奈良時代や鎌倉時代に遡る全国的にも貴重な文化財建造物とともに、近世、近代に建築された歴史的、文化的価値のある建造物も数多く残る。そこで、奈良県建築士会では、地域の歴史的建造物の価値を認識し、その工法や技術等を習得し、これらの建造物を後世に継承できる人材の育成を目指して、文化財専門家育成の講習会を平成22年度から24年度の3年間行った。

講義と演習を含め60時間の講習を行い3年間で103人が修了。地域文化財建造物専門家（ヘリテージマネージャー）として県内各地の歴史的建造物の保全・活用に中心的な役割を担い、まちづくりなどにも加わり地域の活性化に寄与する人材としての活動を進めていく。

[実施内容]

調査地域	調査日	調査件数	参加人数	
押 熊	平成27年 9月19日（土）	138件	建築士会 10名	奈良市 2名
秋 篠	10月25日（日）	131件	建築士会 9名	奈良市 2名
山 陵	11月 7日（土）	136件	建築士会 11名	奈良市 2名
歌 姫	11月22日（日）	82件	建築士会 8名	奈良市 2名
中 山	12月 5日（土）	74件	建築士会 8名	奈良市 2名



押熊



秋篠



山陵



歌姫



中山



調査風景

調査地域の概要

【位置と地理】 平城地域は、奈良盆地が平城山丘陵と西ノ京丘陵との間を細長く入り込んだ秋篠川流域を中心に、両側の丘陵を含めた奈良県の北端に位置する。秋篠川は佐保川の支流で、奈良市二名東町の細谷池及び市立二名中学校東側の崖下を水源として登美ヶ丘・中山町・秋篠町を東流し、秋篠町の平城小学校の北を過ぎたあたりで南に転じ、平城宮跡の西をかすめて奈良盆地を南下、奈良市と大和郡山市の境辺りで佐保川に合流する。農業を中心に発展した地域であり、多くの田地を耕作するために古くから多くの溜池を作り、灌漑用水を確保した。地域には大小の溜池が点在する。

中央平野部を南北に県道バイパスが通り、歌姫には古代から大和国と山城国を結ぶ主要な道であった歌姫越京街道が南北に走る。北側には、昭和40年代の宅地開発に伴い整備されたならやま大通りが、平城地域を取り囲むように走り、近代的文化住宅街として大きく広がった街を繋ぐ。東側には京奈和道につながる国道24号があり、近鉄奈良線と京都線もあり、大阪・京都への交通の便が良い。

延喜式神名帳にみえる添御縣坐神社の他、八幡神社が4ヶ所あり、秋篠寺の本堂は国宝に、八所御霊神社の本殿と、中山町の八幡神社の本殿は奈良県指定有形文化財に指定されている。



【歴史】 秋篠川に沿ったこの地域は、緩やかな丘陵に囲まれる。秋篠町の西山丘陵から銅鐸が出土していることや、佐紀町で弥生遺跡が発見されていることなどから、平野部では古くから水田耕作が行われ、その付近において自然発生的に集落が形成されたと想像される。大きな御陵山林を抱えた神功皇后陵の他、成務天皇陵、日葉酢姫命陵、称徳天皇陵などがある佐紀古墳群地域でもあり、大和の門戸となるこの地域の守りとして歴代天皇を葬り、その陵墓に大和の安泰を祈ったとされ、古代から発展していたことがわかる。平城宮造営のための瓦窯も各所で発見されている。

秋篠の地名は奈良時代から存在し、続日本紀などにも記録されている。押熊の名も古代の史料にみえる。中世、押熊・中山は秋篠郷に、山陵・歌姫は超昇寺郷に属した。秀吉の文禄検地では押熊、中山、秋篠、超昇寺の4村となっている。秋篠村は、関ヶ原の戦いの後、秋篠村と本郷村に分けられた。超昇寺村は、延宝5年(1677)頃に超昇寺・西畑・山上・山陵・歌姫・常福寺・門外・横領の8村に分解したらしい。山上村は新超昇寺村とも呼ばれた。

維新後、明治4年(1871)に秋篠村と本郷村が合併し、秋篠村となる。同9年(1876)新超昇寺村ほか4村が合併して佐紀村となったが、間もなく新超昇寺(山上)は佐紀村から分かれ山陵村と合併した。同22年(1889)押熊・中山・山陵・秋篠・歌姫の5村が合併し「平城村」が誕生した。添下郡に属したが、同30年(1897)平群郡との合併で生駒郡となる。

大正3年(1914)大阪電気軌道(現近鉄奈良線)が開通する。昭和3年(1928)には奈良電気鉄道(現近鉄京都線)が開通し、山陵に平城駅ができる。平城駅の乗降者数は、農村から住宅地へと発展する昭和30年代に急激に増えることになる。

昭和26年(1951)、平城村は奈良市に編入される。高度成長期、丘陵地を切り開いて住宅地が建設され、平城一帯は大きな変化を遂げた。昭和46年(1971)には日本住宅公団が平城ニュータウンの造成工事に着手、大規模な住宅街が開発され、大阪のベッドタウンとしてますます人口が急増し、景観の変貌も著しい。しかし、今回調査した地域では現在も米作りを中心に農業は続けられていて、田園風景とともに、かつての集落の形態も残されている。

[産業] 平城地域では、長く農業が主な産業であった。江戸中期には、米麦中心の農業経営を行いながら、水不足を解決する為、綿花栽培を取入れ、裏作には菜種作りも行ったとされる。また、茶畑経営もしていた。これらの商品農作物の栽培は地形や土壌に対応し、特に年貢の銀納化に伴い普及した。歌姫では、江戸中期、米・麦・大豆・小豆・蕎麦のほか木綿などの換金農作物や大根などの野菜が主な農作物であった。秋篠のゴボウはこの地の土壌に適し、特産品として知られていた。家内的な副業として奈良晒(さらし)の生産が行われていたこともうかがえる。

明治に入ってもほとんどが農業に従事し、米作りを中心に夏は綿花栽培を採り入れ、裏作に麦類や豆類、菜種を作り、畑作では茶やさつまいも・大根を植えるなど、江戸からの変化はあまりなかったようである。しかし、綿花は輸入綿に押され、菜種は石油ランプの進出、電灯の普及や機械製油の発展で衰退していく。これに反し、茶は商業農産物としてかなりの産額を得たようである。また、大根・筍・生姜・うど・西瓜等の野菜作りの他、養蚕・養鶏を副業として取り入れるようにもなっていく。松茸は古くから自給用に採集されていたが、昭和に入ると大阪電気軌道と協力して、松茸山を開放して乗客誘致策の一役を買うようになり、昭和30年代まで続いた。

農業以外では、大正期以降複数の織物工場が操業していた。昭和14年(1939)には秋篠に競馬場ができるが、昭和26年(1951)事実上廃場となった。昭和25年(1950)に競馬場に併設された県営競輪場は、その後大きな収益を上げて地方財政の有力な財源となっていたが、近年は厳しい収支が続いている。

享保9年各村の本百姓と水呑百姓

	家数	本百姓	水呑百姓
押熊村	117	108	9
中山村	102	99	3
本郷村	9	7	2
山陵村	90	82	8
歌姫村	56	55	1

(出典：平城村史)

明治4年9月 牛所有数

	1人所有	2人所有	3人所有	合計	備考
押熊村	32頭	10頭	—頭	42頭	すべて牝牛
中山村	31	9	3	43	すべて牝牛
本郷村	2	2	—	4	不明
秋篠村	25	12	—	37	牝牛2頭、雄牛35頭

※明治4年5月の「秋篠村牛取調書上帳」では34頭(うち11頭は2人で所有)、天理図書館文書による。

(出典：平城村史)

主な参考文献：『平城村史』平城村史編集委員会、昭和46年。山田熊夫『奈良町風土記続編』昭和54年。『奈良県の地名』平凡社、昭和56年。「AGUA」<<http://agua.jpn.org/yamato/saho/akisino.html>>

地域全体調査結果

調査表		平成27年度 奈良市内における近世近代の歴史的建造物の掘り起こしによる地域活性化事業調査票 平城地区	
調査No.	通しNo.	調査日	平成 27 年 月 日
調査者	所在地		
物件名			
敷地前面	<input type="checkbox"/> 門(→附属屋の項へ) <input type="checkbox"/> 土塀 <input type="checkbox"/> 板塀 <input type="checkbox"/> その他塀()		
	形態 <input type="checkbox"/> 住宅 → 和風(商家・農家・その他)・洋風・その他 <input type="checkbox"/> 住宅以外 → 和風・洋風・その他 用途()		
	年代・分類 考えられる年代の範囲を囲む 江戸・明治・大正・戦前・戦後(S30年代以前)・現代(S40年代以後) 具体的な年代わかれば ↓ <input type="checkbox"/> 歴史的建造物 <input type="checkbox"/> 中間的なもの <input type="checkbox"/> 非歴史的建造物 (以下「主たる建物」については記入不要)		
	構造 <input type="checkbox"/> 木造 <input type="checkbox"/> その他()		
	階数 <input type="checkbox"/> 平屋 <input type="checkbox"/> つし二階 <input type="checkbox"/> 本二階 <input type="checkbox"/> その他()		
	屋根形式 <input type="checkbox"/> 切妻 <input type="checkbox"/> 入母屋 <input type="checkbox"/> 寄棟 <input type="checkbox"/> 片側切妻片側入母屋 <input type="checkbox"/> その他() <input type="checkbox"/> 妻入 (大和棟・落棟)		
	葺材 <input type="checkbox"/> 草葺 <input type="checkbox"/> 草葺(金属板葺) <input type="checkbox"/> 瓦葺 <input type="checkbox"/> 金属板葺 <input type="checkbox"/> その他 <input type="checkbox"/> 平入 (木瓦・桧瓦・鉄板・銅板)		
	張出形態 <input type="checkbox"/> なし <input type="checkbox"/> あり → 切妻妻入・入母屋妻入・その他()		
	表門 <input type="checkbox"/> 長屋門 <input type="checkbox"/> その他()		
	離れ <input type="checkbox"/> 棟 (内訳) <input type="checkbox"/> 納屋 <input type="checkbox"/> 棟 (内訳)		
附属屋	例) 草葺・便所・風呂・井戸・土蔵等、等		
	※気づいた点を記入(規模・デザイン・材料・改造・屋敷構え(石垣、擁壁等)、その他適宜)		
備考			

敷地前面
門、塀、石垣等の有無を確認。

主たる建物(主屋)
歴史的建造物か中間的なものか非歴史的建造物かを判別し、歴史的建造物と中間的なものは屋根形状、葺材、階数、構造などを調査。

附属屋
歴史的建造物か中間的なものか非歴史的建造物かを判別し、屋根形状と構造を記録。

歴史的建造物：建築から概ね50年以上を経過している建物

中間的なもの：建築年代は新しいが、伝統的な意匠の建物

非歴史的建造物：上記以外の新しい建物

[概要]

主屋は、歴史的建造物149件、中間的なもの192件が確認でき、歴史的建造物だけでなく、伝統的な意匠を継承する新しい建物も多数あることがわかった。また、伝統的な意匠形式の附属屋が多数残っていることもわかった。こうした中間的な主屋や伝統的な附属屋の存在は、景観に大きく寄与している。長屋門は、時代による形式の差異が顕著なようで、今後の調査研究に期待したい。

ヒアリングによると、昔、米作りはほとんどを牛に頼っており、牛小屋を敷地内に持っていたところが多く、中には家族同然に主屋で一緒に暮らしていたところもあったようである。また、養蚕業も行われ、蚕小屋を持つ家もあり、中にはつし二階や畳敷の部屋で蚕を飼っていたところもあったという。農家には多くの建物が必要であったことが伺えた。

このように、主屋は昭和30～40年代に建て替えられたものも多く見られたが、敷地を囲う長屋門やその他の附属屋が比較的多く残り、歴史ある町並みを現代に伝える上で大きな役割を担っている。

	押熊	中山	山陵	秋篠	歌姫	計	
調査件数 (敷地)	138	74	136	131	82	561	
主屋	歴史的建造物	33	20	26	31	39	149
	中間的なもの	54	35	48	36	19	192
	非歴史的建造物	50	19	61	63	21	214
	不明・その他	1	0	1	1	3	6
附属屋	長屋門	20	11	30	34	32	127
	離れ	90	85	74	69	55	373
	納屋	45	46	29	29	65	214
	土蔵	67	32	37	42	30	208

※不明・その他とは塀や庭木などにより主屋が確認できなかった件数、及び、住宅以外の件数

[主屋について]

主屋のうち歴史的建造物と中間的なものについて、屋根形式別、階数別の件数を下に示した。屋根形式別では、草葺（金属板葺となっているものを含む）の件数と、そのうちの和棟の件数も示した。

歴史的建造物149件のうち、19件が草葺であった。和棟は押熊で4件、山陵で2件確認できた。その他、入母屋造のものが歌姫以外の4地区に計7件、片側入母屋片側切妻造のものが中山に3件、寄棟造のものが押熊と中山で1件ずつ確認できた。ほとんどが金属板葺となっていたが、和棟の1件は現在も草葺が維持されていた。歴史的建造物である主屋のうち、押熊では約4割、中山では約3割が草葺であった。ヒアリングから、葺材は麦わらが多く使われていたこともわかった。

歴史的建造物の約7割が切妻造であるのに対し、中間的なものでは約4割であった。入母屋造や片側入母屋片側切妻造は中間的なものに多く見られた。

主屋屋根形式	歴史的建造物 149件						中間的なもの 192件					
	押熊	中山	山陵	秋篠	歌姫	計	押熊	中山	山陵	秋篠	歌姫	計
切妻造 (草葺) うち和棟	23 (5) ₄	11	22 (2) ₂	11	35	102 (7) ₆	18	14	22	11	11	76
入母屋造 (草葺)	5 (3)	3 (2)	1 (1)	5 (1)	2	16 (7)	21	10	9	13	3	56
片側入母屋片側切妻造 (草葺)	4	4 (3)	1	14	2	25 (3)	13	11	15	11	7	57
寄棟造 (草葺)	1 (1)	1 (1)	1	-	-	3 (2)	2	-	1	-	-	3

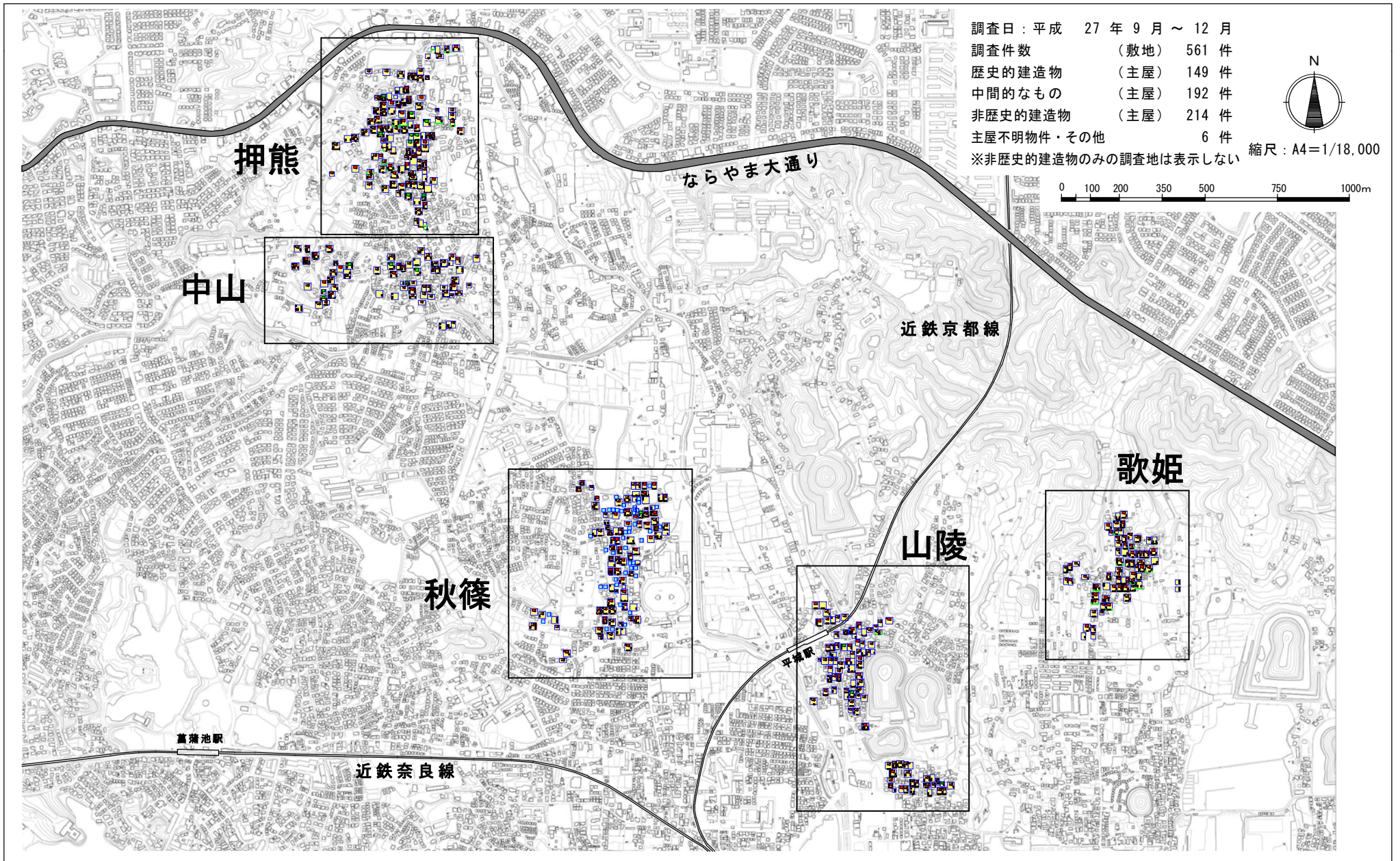
主屋階数	歴史的建造物 149件						中間的なもの 192件					
	押熊	中山	山陵	秋篠	歌姫	計	押熊	中山	山陵	秋篠	歌姫	計
平屋	15	7	8	3	4	37	4	6	5	5	3	23
つし二階	14	11	15	18	21	79	5	3	4	5	-	17
本二階	4	2	3	10	14	33	45	26	37	26	18	152

正面に玄関を張り出して設けている主屋が多く見られたので、その屋根形式別の件数を下に示した。中間的なものに多く見られたが、秋篠では、歴史的建造物にも10件見られた。多くは入母屋造であるが、切妻や片流れの形式をとるものも、数は少ないが各地区で見られた。玄関を張り出す例は、庶民の住宅に玄関の設置が可能になった近代になって、生活スタイルの変化に合わせて徐々に増えていったと考えられる。

張出玄関屋根形式	歴史的建造物 149件						中間的なもの 192件					
	押熊	中山	山陵	秋篠	歌姫	計	押熊	中山	山陵	秋篠	歌姫	計
入母屋造	3	2	5	10	2	22	28	25	32	25	6	116
切妻造、片流れ	1	-	1	-	1	3	5	3	3	1	2	14

玄関部を張り出して設けた主屋の例
 (張り出し部の屋根形状は入母屋造)
 か切妻造が多い

調査地分布図 (平城地区全体)



押 熊

調査日

平成27年 9月19日



町並み遠望



地区内道路

1 一地区の特徴・考察

[景観・敷地]

- ・奈良盆地の最北端にあり、秋篠川支流押熊川流域に位置する。
- ・中山町から勧請したと伝える八幡神社が集落の北西に位置する。
- ・集落は丘陵地の裾にあるため、敷地は平野部の農家に比べ狭く、形状が不規則である。
- ・「囲い造」が景観上の特徴で、主屋、離れ、隠居屋、長屋門、土蔵、納屋、牛小屋、便所、土塀等が配置される。敷地形状により配置は定形でないものの、傾向として、井戸、風呂場、便所を主屋からみて同じ方向（南面東側）に配置している。
- ・牛小屋は、主屋内に設ける場合と、別棟として建てる場合があるという。
- ・調査範囲は第1種低層住居専用地域。周辺は、東側の県道沿いが準住居地域、北側のならやま大通り沿いが第1種住居地域で、それ以外は第1種低層住居専用地域が広がる。

[主屋]

- ・屋根の形状は、切妻、入母屋、片側切妻片側入母屋で、落棟となっているものが多く、大和棟は4棟確認できた。
- ・ほとんどが棧瓦葺であるが、9棟が草葺であった。ただし、1棟を除き現在は金属板で覆われている。
- ・歴史的な意匠を踏襲した新しい建物（中間的と分類したもの）の多くは張り出した玄関があり、そうした玄関のほとんどが入母屋妻入であった。

[附属屋]

- ・蔵は1敷地で1～2棟が多いが、3～4棟あるものも確認できた。乾蔵が多く、置屋根形式のものも見られた。
- ・門は、長屋門22棟、棟門12棟を数え、土塀・土塀風塀・板塀等で敷地を囲繞している。
- ・井戸屋形が3棟確認できた。

[その他の特徴・感想]

- ・京都府との境には平城宮で使われた瓦等を焼いた押熊瓦窯跡がある。
- ・仲哀天皇の忍熊皇子の墳墓と伝えられるものがある。
- ・集落は丘陵の裾にあるため傾斜地にあり、坂道や石積等が見られる。古老の話によるとこの村はため池を持ち、水には苦勞しなかったようである。
- ・集落周辺は昭和30年代以降、都市化により地域変貌し、自然との関わりが少なくなってきた。
- ・新しく建て替えられた建物にも、歴史的な意匠が活かされて、集落の景観がよく維持されている。
- ・大和棟や草葺など歴史的な建物がよく残っており、維持管理も比較的に良好で、引き続きこの形態で利用してほしい。

2 地域の風景 町並み



建物写真 押熊	
<p>主屋 大和棟 外観は伝統的な形式を残したまま、内部を改修している。</p>	<p>主屋 入母屋 大屋根は草葺で金属板で覆い、下屋は瓦葺としている。</p>
<p>主屋 入母屋 嘉永4年(1851)の建築とされる。入母屋の切妻部分は比較的小さい。</p>	<p>主屋 寄棟 寄棟は数が少ない。草葺を金属板で覆っている。</p>
<p>屋敷構え 調査地区内で最大規模の屋敷。敷地内の棟数も多く、大和棟の主屋を中心に良好な保存状態である。</p>	<p>主屋 大和棟 主屋は高塀造の大和棟。現在も草葺で、上手にも瓦葺の落棟がある。それぞれの妻の装飾も特徴的。</p>
<p>備考 主屋の屋根形状は、切妻、入母屋、片側切妻片側入母屋などが多く、寄棟は少ない。高度経済成長期以降に建て替えられた主屋には張出玄関があり、張出玄関の屋根は入母屋が圧倒的に多かった。大和棟も比較的良好に残っている。</p>	

建物写真 押熊



屋敷構え・主屋
 典型的な「囲い造」の屋敷構えをもつ。また、妻には装飾を備える。



主屋 大和棟
 主屋は明治27年(1894)建築。高塀造の大和棟。



主屋 切妻
 大きな張出玄関がある。



長屋門
 長屋門に煙出しがつくのが特徴的。2件みられた。



井戸屋形
 丘陵地にあるが、井戸水は涸れてないらしい。



牛小屋
 長屋門から見て右手にあり、かつては牛小屋であった。

備考

附属屋には、門、土蔵があり、これらは、敷地条件や方位によって位置が決まる。牛小屋、納屋などは、主屋の玄関から下手側に建ち並ぶことが多かった。主屋前面には庭が設けられる。

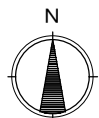
建物写真 押熊	
	
<p>土蔵 土蔵は敷地内に1～2棟で、乾蔵が多く残る。置屋根形式や、基礎に高い石積みのあるものがみられた。</p>	<p>土蔵 土蔵の窓まわりの凝ったデザイン。</p>
	
<p>長屋門 戸口の形式。狭い潜戸が付く。</p>	<p>門からの眺め 右側に井戸屋形、左側に主屋へのアプローチ、左端に塀重門が見える。</p>
	
<p>土塀 所々に敷地を囲うこのような塀が見られる。</p>	<p>工場 織物工場であった建物。全8棟。切妻造の棧瓦葺で、外壁は下見板張り仕上げ。</p>
<p>備考 道路は比較的に狭隘であり、建物の全体をとらえることが難しい地区であった。いくつか気になったものを紹介した。</p>	

分布図

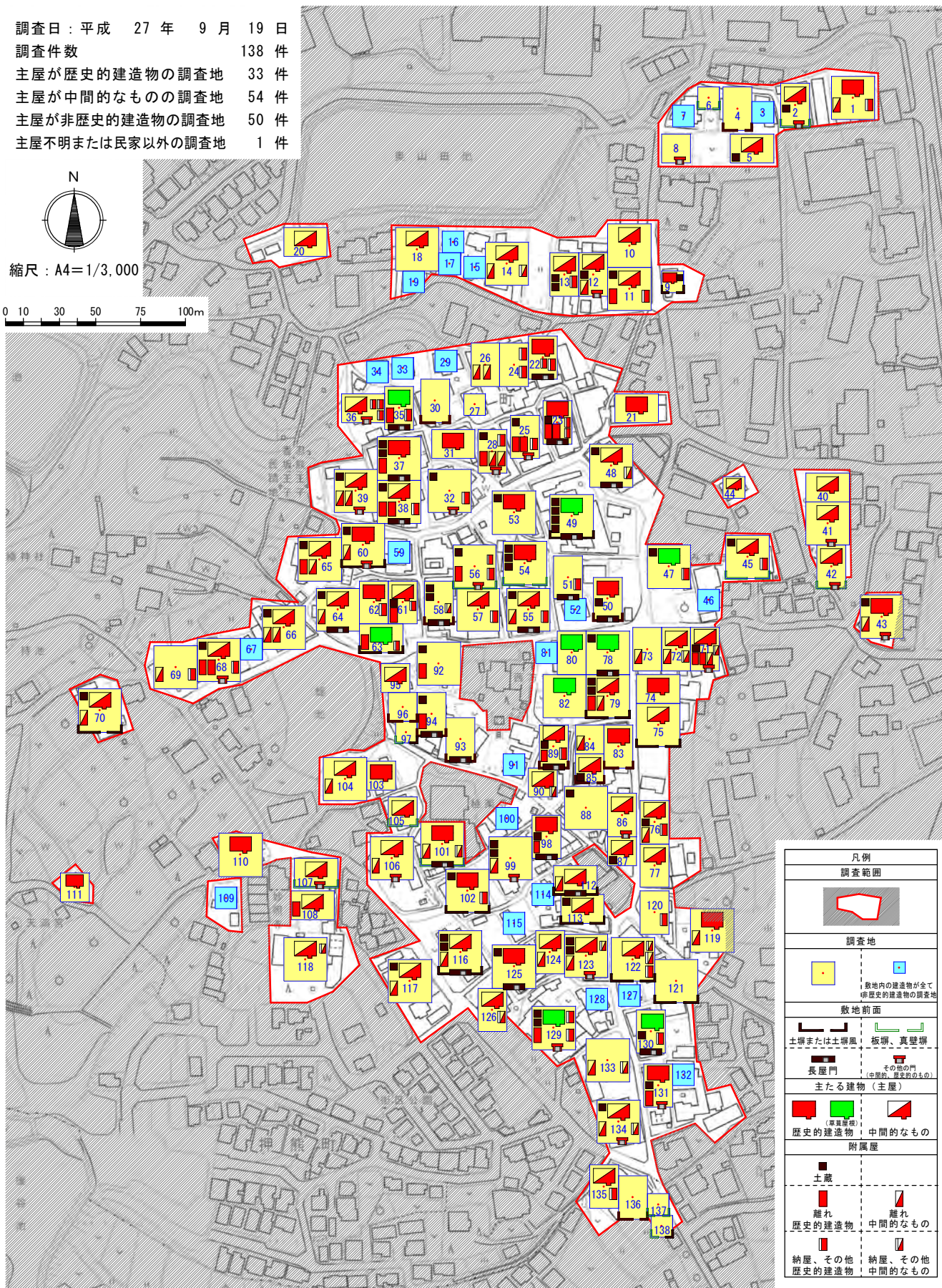
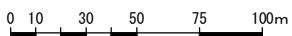
(地区名)

押熊

調査日：平成 27 年 9 月 19 日
 調査件数 138 件
 主屋が歴史的建造物の調査地 33 件
 主屋が中間的なものの調査地 54 件
 主屋が非歴史的建造物の調査地 50 件
 主屋不明または民家以外の調査地 1 件



縮尺：A4=1/3,000



凡例	
調査範囲	
調査地	
敷地内の建造物が全て 非歴史的建造物の調査地	
敷地前面	
土塀または土塀風、板塀、真壁塀	
長屋門 <small>その他の門 (中階的、屋敷的のもの)</small>	
主たる建物(主屋)	
<small>(非家屋型)</small> 歴史的建造物 / 中間的なもの	
附属屋	
土蔵	
離れ	
歴史的建造物	中間的なもの
納屋、その他	
歴史的建造物	中間的なもの
納屋、その他	

中山

調査日

平成27年12月5日



丘陵地に住宅が広がり宅地開発が進む

1 一地区の特徴・考察

[景観・敷地]

- ・中山町は、秋篠町と押熊町との間に位置し、西ノ京丘陵の端が東に伸びた場所に発展した。地区の中心に八幡神社・安楽寺・大辯才天がある。大淵池東の棕谷も中山に属した旧集落であるが、今回は調査対象としなかった。
- ・昭和47年(1972)に奈良時代の平城宮造営に伴う瓦を焼いた瓦窯跡が発見され、平成28年(2016)3月に史跡に指定されている。
- ・江戸時代は秋篠川で郡山まで年貢米が運搬された。当地区での川の氾濫はなかったとき。上流の大淵池は元禄5年(1692)の築造である。
- ・畑では、ウド・お茶・桑が栽培され、養蚕が盛んで蚕部屋が各家にあった。
- ・農業を中心とした町であったが、近年は丘陵地帯の住宅開発が進んでいる。
- ・調査範囲と周辺は第1種低層住居専用地域であるが、東側の県道沿いは準住居地域、南側の都市計画道路予定地沿いは第1種住居地域である。また、集落南側の旧道以南はあやめ池風致地区になる。

[主屋]

- ・歴史的建造物が20件、中間的なものが35件、合計55件が確認できた。
- ・歴史的建造物のうち、草葺（現在は金属板葺）が6件確認できた。
- ・20件の歴史的建造物のうち、つし2階が11件と最も多く、平屋7件、本2階2件であった。屋根形状は、切妻が4件、切妻落棟が7件、入母屋3件、寄棟1件であった。ほとんどが平入で、妻入は1件であった。

[附属屋]

- ・離れは歴史的建造物が9件、中間的なものが34件、納屋は歴史的建造物が16件、中間的なものが18件確認できた。
- ・歴史的建造物のうち、長屋門が6件、棟門が2件確認できた。
- ・主屋が歴史的建造物のうち、蔵が13件と多く残されており、1敷地に3棟の蔵をもつものもあった。また、離れは18件あり、3棟以上の附属屋を持つものが多い。

[その他の特徴・感想]

- ・歴史的建造物・中間的なものが多く残されている農村集落で、周囲には田畑が今も多く残されている。主屋が歴史的建造物であるもののなかには空き家となっているものもみられ、他の地域同様、その活用が今後の課題になると思われる。

2－地域の風景 町並み



建物写真 中山



主屋 片側切妻片側入母屋(落棟)
 大正12年(1923)に建築されたという農家。上手を入母屋造とし、下手は大和棟となる。



煙出し
 10年前に屋根改修されたが、高塀の棟飾りは焼き直して再使用されたと聞く。落棟部の煙出しも残された。



主屋 片側切妻片側入母屋
 明治時代に建築されたとみられる農家。草葺であったが現在は金属板葺となっている。



主屋 つし二階
 つし二階、切妻、落棟、棧瓦葺。玉石基礎とする。背面側に井戸が残る。



主屋 入母屋
 大正11年(1922)築とされ、当初草葺であったが現在はスレート葺となっている。下屋は瓦葺である。



主屋 入母屋
 明治以前に建築されたとみられ、草葺であったが現在は金属板が張られる。煙返しの大梁は撤去されている。

備考

建物写真 中山



主屋 片側切妻片側入母屋
 明治末頃に建築された農家。草葺の上に金属板葺。庇や上手の落棟は瓦葺。



主屋 つし二階
 束石建であるので戦前に建築されたと思われる。切妻棧瓦葺で大屋根に煙出しが残る。



主屋 つし二階
 大正～戦前頃に建築された農家で、つし二階の窓に格子が残る。離れ・乾蔵も歴史的建造物が残されている。



煙出し
 煙出しも残されている。



主屋 つし二階
 大正～戦前頃に建築された農家で、切妻平入。



主屋 入母屋造
 戦後に建築された農家で、屋根が入母屋、玄関も入母屋妻入りとなっている。

備考

建物写真 中山



長屋門
 漆喰壁、腰板張、切妻で、両側に部屋がある。



長屋門
 納屋・長屋門・異蔵が接続して建っている。



二階建の門屋
 門と異蔵が接続し、異蔵の一部から階段で門屋の二階に上がる。



真壁塀
 瓦葺屋根、漆喰壁、腰板張の真壁塀。



虫籠窓
 主屋に接続した離れのつし二階部に虫籠窓が残る。



土蔵
 乾蔵、腰壁部分にも窓がある。

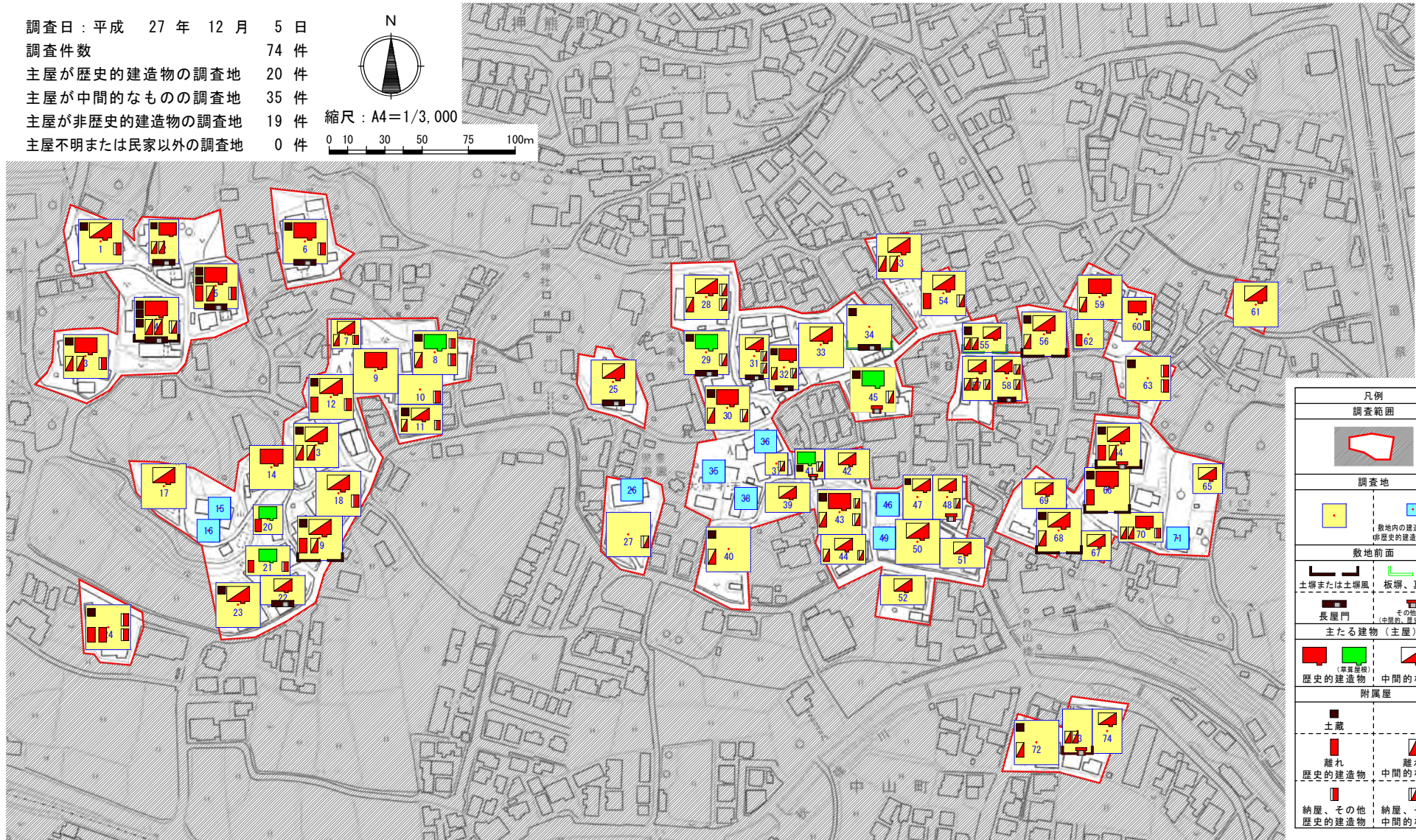
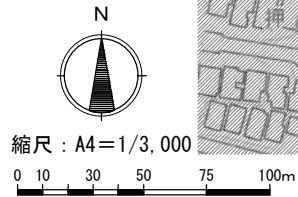
備考

分布図

(地区名)

中山

調査日：平成 27 年 12 月 5 日
 調査件数 74 件
 主屋が歴史的建造物の調査地 20 件
 主屋が中間的なものの調査地 35 件
 主屋が非歴史的建造物の調査地 19 件
 主屋不明または民家以外の調査地 0 件



凡例	
調査範囲	
調査地	
敷地内	
敷地内	
敷地前面	
土塼または土塼風 板塼、真壁塼	
長屋門 (土塼、土塼風の門)	
主たる建物(主屋)	
歴史的建造物 (草葺屋根) 中間的なもの	
附属屋	
土蔵	
離れ 歴史的建造物 離れ 中間的なもの	
納屋、その他 歴史的建造物 納屋、その他 中間的なもの	

山 陵

調査日

平成27年11月7日



御陵に寄り添い暮らしてきた農村集落

1 一地区の特徴・考察

[景観・敷地]

- ・ 広い山陵町の中で今回の調査範囲は近鉄平城駅東側にある3つの陵墓周辺の古い集落が対象。農村集落としては比較的高い集中度であり、基本的に農地は郊外にある。
- ・ 3つの陵墓に寄り添い付かず離れずの距離感の中に北側(山陵)と南側(山上)の集落が形成され、御陵を中心とし求心的な空間にまとまる。町名も御陵の存在に由来している。なお、山上は明治に山陵と合併したが、集落は佐紀と連担し、小学校区も佐紀と同じ都跡校区であるなど、特殊な位置を占める。
- ・ 直線道路は少なく、曲がり、ずれ、折れながら高低差も相まって入り組んだ細い路地が多い。自然の地形そのままに最小限の造成で屋敷が作られ、集落内の道は昔とほとんど変わらない。
- ・ 昭和3年(1928)の鉄道開通と戦後の開発で、周辺環境は激変することになった。農業を主として発展した町だが、駅周辺は開発され、農村集落とは少々違った趣きを醸し出している。
- ・ 平城駅南側の第1種住居地域以外、ほとんどが歴史的風土保存区域で、平城山風致地区であり、市街化調整区域となっている。

[主屋]

- ・ 多くの家が戦後に建て替えられ、ほとんどが本2階建て瓦葺で、張出玄関を持つものもある。建て替えられていても伝統的意匠の主屋が多い。地元の大工棟梁が多くの建て替えを請け負っていたことが考えられ、伝統様式を伴わない主屋は近年のものが多く、駅周辺では現代的な意匠や仕上げの主屋も混在している。
- ・ 大和棟の主屋が2件、入母屋草葺(現在は金属板葺)形態の主屋も山上地区に1件確認できた。
- ・ 切妻、入母屋など混在し、家並みの統一感は少ない。

[附属屋]

- ・ 長屋門や蔵、離れを持つ屋敷も多く残されていて、農家としての作業庭が残る家屋もあるが、「囲い造」が多く集落が密集しているせいか各屋敷の開放感は少ない。
- ・ 山上地区には長屋建てや一戸建ての貸家が集落の大きさや家屋の数からすると多く残されている。しかし空き家になっているものも多い。

[その他の特徴・感想]

- ・ 魅力的な雰囲気醸し出す集落は規則正しい基盤の目状の道では無く、一見勝手気儘で自由な形の道がある。複雑に入り組んだ道は、他所者には意地悪く翻弄すると同時に、勝手を知る地元民には目を閉じて歩けるくらいに身体に沁み込んだ間合いで強い共同体意識をもたらす。計画された都市では無く、自然発生的に生まれた集落はその様な特徴を持つ空間を備えており、そうした特徴的な道空間は住人の気持ちを暗黙のうちにひとつに結びつけ、その要素の密度が濃いほど、そこで生まれ育った人々の住む場所への愛着は深いものになると考えられる。山陵町はまさにそういった特徴を色濃く残している集落だと思える。

2－地域の風景 町並み



魅力的な路地・小路が多く、アイストップに家屋の印象的なところが目に入ることが多い！



建物写真 山陵



屋敷構え・主屋

生垣で囲われた屋敷。主屋は虫籠窓があるつし二階。張出玄関は増築。

主屋

長屋門・異蔵を持ち、主屋は切妻（落棟）である。虫籠窓・煙出しを備える。



主屋

戦後の建築で、設計者が特定されており、図面も残されている。瀟洒な和の風情の近代住宅。

屋敷構え・主屋

数少ない大和棟の主屋で、附属屋もよく残っている。



主屋

広い通りに面し虫籠窓や格子戸があるつし二階。明治の建築で酒屋を営んでいたという。

屋敷構え・主屋

昭和初期の建築とされ、つし二階虫籠窓付。土蔵・離れ・納屋は戦後に同時に建てられたと思われる。

備考



本瓦葺に鳥伏間のある屋根、真壁漆喰塗りの妻壁など、伝統意匠、印象的な風情ある仕上げが点在する。

建物写真 山陵



長屋門
 長屋門を構える屋敷も多くあり、全体で30棟確認できた。歴史的なものは12棟である。

土蔵
 土蔵のある屋敷は31件（内6件は2棟）、計37棟を確認。門屋や離れと一体的なものもある。



細部の意匠(煙出し)
 落棟に煙出しを備える伝統的な形式を持つ家が多く残されている。



大和棟
 集落で確認できた大和棟の主屋2棟。トタンが被せてあるが、ともに明治以前の建築とみられる。



駅周辺の特徴的な建物
 駅周辺には、町家風の家や、四方から道路が集まるため、土地形状に合わせた三角建物が複数ある。



貸家
 貸家があるが空家が多い。そうしたところは生活の匂いが無く時間が止まっている。



今は使われていない農業用の納屋などが残る。駅付近では、マンションと呼応するように建つ姿が、どこかに置いてきてしまった忘れ物の様に映る。

建物写真 山陵



屋敷構え・主屋・土蔵
 長屋門・土蔵・離れを備えた広い屋敷。主屋はつし二階。乾蔵は本瓦葺で古い。



主屋
 明治期の建築と思われ、煙出し・虫籠窓がある。低く落ち着いたプロポーション。



主屋
 入母屋草葺屋根にトタン葺。近年の増改築の影響が少なく、古い時代の姿をよく留めている。



主屋
 つし二階の慎ましいシンプルな外観に張出玄関が付く構成である。



附属屋
 離れは底を銅板葺きの吹き寄せ垂木とする。長屋門の窓には持ちだしの手摺が見られる。



附属屋
 道路を挟んだ向かいの公民館に附属する倉庫と思われる、一部土蔵風の意匠をもつ。

備考



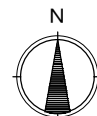
集落には寺院や神社があり、社寺との関わり合いが集落の形成に関係する求心性のある町並み。

分布図

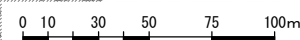
(地区名)

山陵

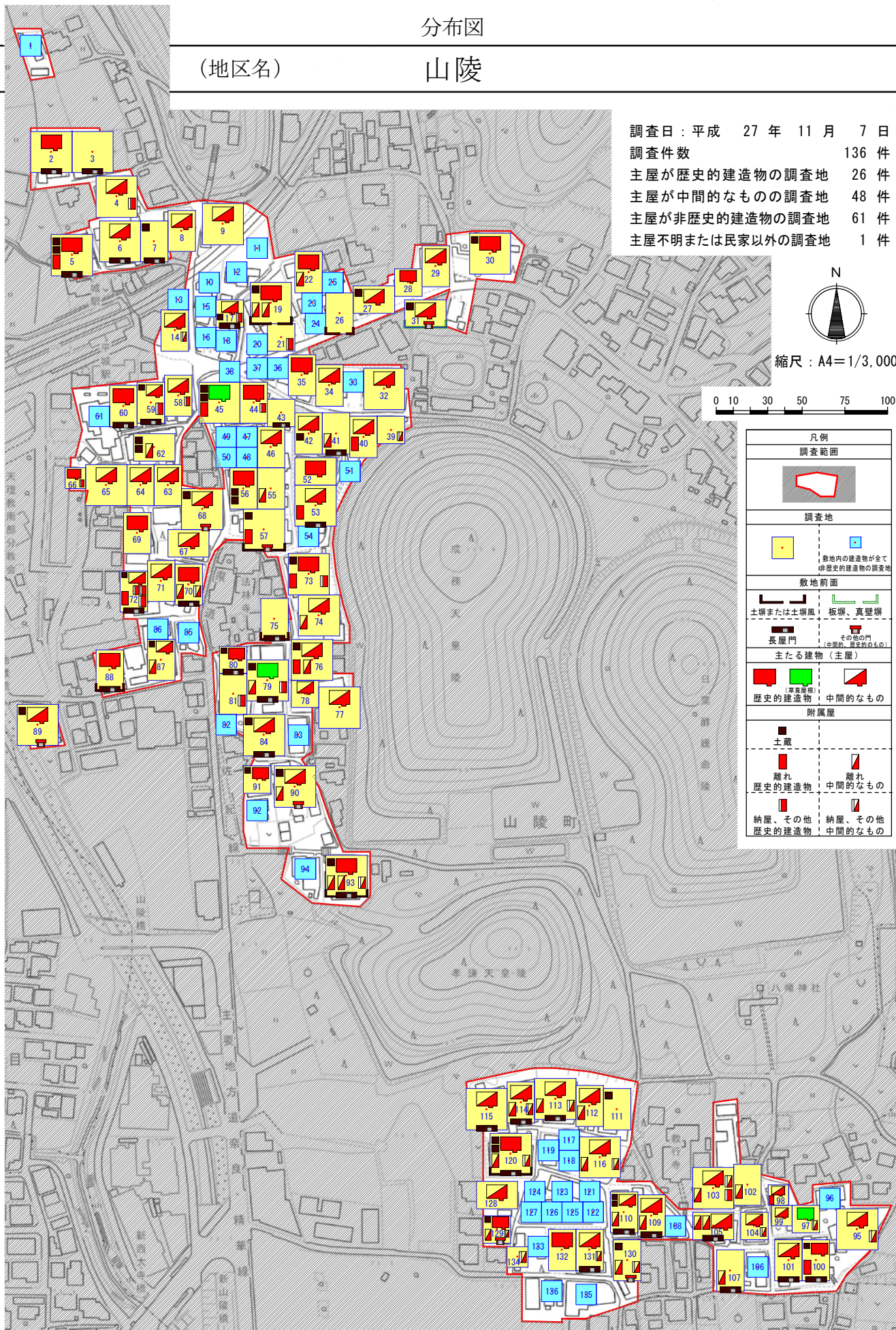
調査日：平成 27 年 11 月 7 日
 調査件数 136 件
 主屋が歴史的建造物の調査地 26 件
 主屋が中間的なものの調査地 48 件
 主屋が非歴史的建造物の調査地 61 件
 主屋不明または民家以外の調査地 1 件



縮尺：A4=1/3,000



凡例	
調査範囲	
調査地	
	敷地内の建造物が全て歴史的建造物の調査地
	敷地内の建造物が全て非歴史的建造物の調査地
敷地前面	
	土塀または土塀風
	板塀、真壁塀
	長屋門 (主屋前)
	その他の門 (土塀前、屋敷前などのもの)
主たる建物 (主屋)	
	歴史的建造物
	中間的なもの
	附属屋
	土蔵
	離れ 歴史的建造物
	離れ 中間的なもの
	納屋、その他 歴史的建造物
	納屋、その他 中間的なもの



秋 篠

調査日

平成27年10月25日



街並みを色濃く特徴づける長屋門群、個々に多様な意匠を持つ

1 一地区の特徴・考察

[景観・敷地]

- ・奈良市西北部、南流する秋篠川の西側に位置する。秋篠川が育てた小さな平野にうまれた集落で、農業を中心として栄えた。大正3年(1914)大阪と奈良とを結ぶ電車が開通、昭和14年(1939)に奈良競馬場(後に競輪場となる)が地区東側に開業され、戦後の急速な住宅需要により、地区周辺に新しい町が誕生していった時代背景を持つ。
- ・農村としては、比較的密集して建ち並んでおり、住居に隣接した耕作地は少ない。屋敷構えは、「囲い造」がかなりの割合で占めており、かなり大きな庭を囲んだ農家も存在する。道に面した長屋門や、庭越しに構える主屋が街並みを形成していると感じた。しかし、地区西側には秋篠寺と八所御霊神社が程近く位置しており、田畑ののどかな風景も見られる。また、八所御霊神社の西側には、深い生垣に囲まれた、煙突の建ち並んだ窯元があり、印象的な景観となっている。
- ・東側と北側は市街化調整区域であるが、調査範囲はほとんどが第1種低層住居専用地域である。地区内を縦貫するバス通り以西はあやめ池風致地区である。

[主屋]

- ・歴史的建造物が31件、中間的なものが36件確認できた。そのうちの29件が落棟(煙出し付も数件有り)を持ち、ほとんど平入り形式を確認出来ており、農村として発展してきたことが、建築に表れていることが伺える。また、虫籠窓や黒漆喰を凝らした伝統的意匠もあり、草葺(現在は金属板葺)も1件確認できた。

[附属屋]

- ・長屋門を持つ民家も多く、二段の出桁を用いたものまで存在し、豊かな農村地域として発展してきたことがうかがわれる。納屋については、大半は南入りの主屋に対して右側(東側)に配し、井戸を残している民家も数件あった。現存はしていないようだが、牛小屋は別棟とし、そのほかみそ部屋などが建築されていたという。

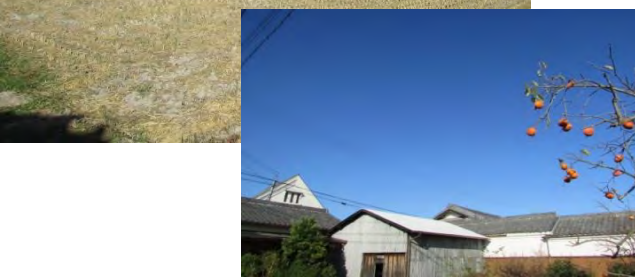
[その他の特徴・感想]

- ・地域の方から昭和初期頃の暮らしを中心にお話を聞くことができた。
- ・秋篠川や溜池を水源とし、稲作・麦作・スイカ・トマトなどが栽培されていた。その他、しじみ・どじょう・草葺等の取引も行われていた。
- ・つし二階には小芝を蓄えていた。また、屋根の葺き替えの際には助け合いの仕組みがあり、共同作業で麦わらによる葺き替えを行ったという。大工さんが一人いて、昭和40～50年にかけて村内で10棟以上建築された。建具や左官等の職方は村外から来ていたという。
- ・競輪(馬)場の仕事もでき、環境も変化していくことになる。
- ・地区には二つの寺院があるが、秋篠寺は光仁天皇開基の寺院で檀家は持たない。村内の檀那寺は西迎寺である。神社や寺院では、今尚様々な地区の行事が執り行われているようだ。

2 地域の風景 町並み



奥には奈良県営競輪場が見える



西迎寺正門



秋篠寺東門



八所御霊神社



秋篠寺本堂



建物写真 秋篠



主屋 片側切妻片側入母屋(落棟)
 外壁は上下階、黒漆喰仕上げ。中央の張出玄関の他、上手にも張出部を持つ。また土蔵は土塗り壁素地の仕上げ。



主屋 落棟部分は入母屋



納屋
 外部に突出した梁仕口の長ホゾが連続し、内部構造がうかがえるとともに、外観を特徴付けている。



主屋 片側切妻片側入母屋(落棟)
 外壁は土塗り壁素地仕上となっている。



主屋 入母屋 本二階建
 二階板張や開口廻りは新しい。妻に木連格子を備える。土蔵は置き屋根形式で妻壁頂部に紋様入り。



主屋 入母屋草葺(現、金属板葺)
 秋篠地区に残る唯一の草葺農家形式。大戸口左側には式台が設えられている。

備考
 歴史散策へと誘う道しるべ。



道に埋め込まれた、かつての名残を感じさせる自然石。



水路沿いに築かれた石積基礎の土塀。昨今ではほとんど見かけなくなったが、当地区でも希少であった。



建物写真 秋篠



長屋門と巽蔵
 門屋と土蔵は続きで建てられている。土蔵は置き屋根形式。

主屋 切妻
 つし部の外壁は大壁漆喰塗り仕上げ。虫籠窓を備えている。



長屋門
 門屋部を落棟・引違戸とした特徴的な構え。主屋は片側切妻片側入母屋（落棟）で、乾蔵が接続する。

主屋
 南面に長屋門、北庭外周に板塀を廻らし、乾蔵をもつ。主屋を含め、端正で整った意匠。



主屋 切妻(落棟)
 落棟部に煙出しが付いている。妻壁の貫を現しとしている。入母屋妻入の張出玄関は後補か。

長屋門 元代官屋敷
 入母屋屋根、漆喰塗大壁、開口廻りの鍔細工、与力窓、門扉の八双金具等、他では見られない意匠を持つ。

備考
 木造モルタル塗のいわゆる文化住宅が数カ所確認できた。いずれも競輪場（前身は昭和14～26年の競馬場）の周囲に位置し、最盛期の労働力確保への住宅需要がうかがえた。



建物写真 秋篠



作業場

敷地西側に作業場・離れ・土蔵が棟続きで配されている。作業場の小屋組は合掌で、つしには農具がしまわれる。



主屋 切妻

虫籠窓・煙出しを持つ。壁は近年塗り替えられたようで、西側妻壁上部は鮮やかな山吹色仕上げ。



登り窯のある窯元

覆屋の中に登り窯等があり、レンガ造の煙突が3本立つ。作業場・研究所もあり、研究所の小屋組は丸太トラス組。奥には展示場・住居が配されている。東側の八所御霊神社の森に馴染んでいる。



数奇屋風平屋

4棟からなる近代和風住宅。妻に藁股や扱首を用いる。庭に面する出隅に手摺を廻らせた掃出し窓がある。意匠良。

土蔵の紋様の色々

妻壁頂部に施された様々な紋様が見られた。

備考 左官による装飾の数々。

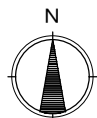


分布図

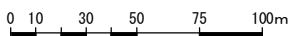
(地区名)

秋篠

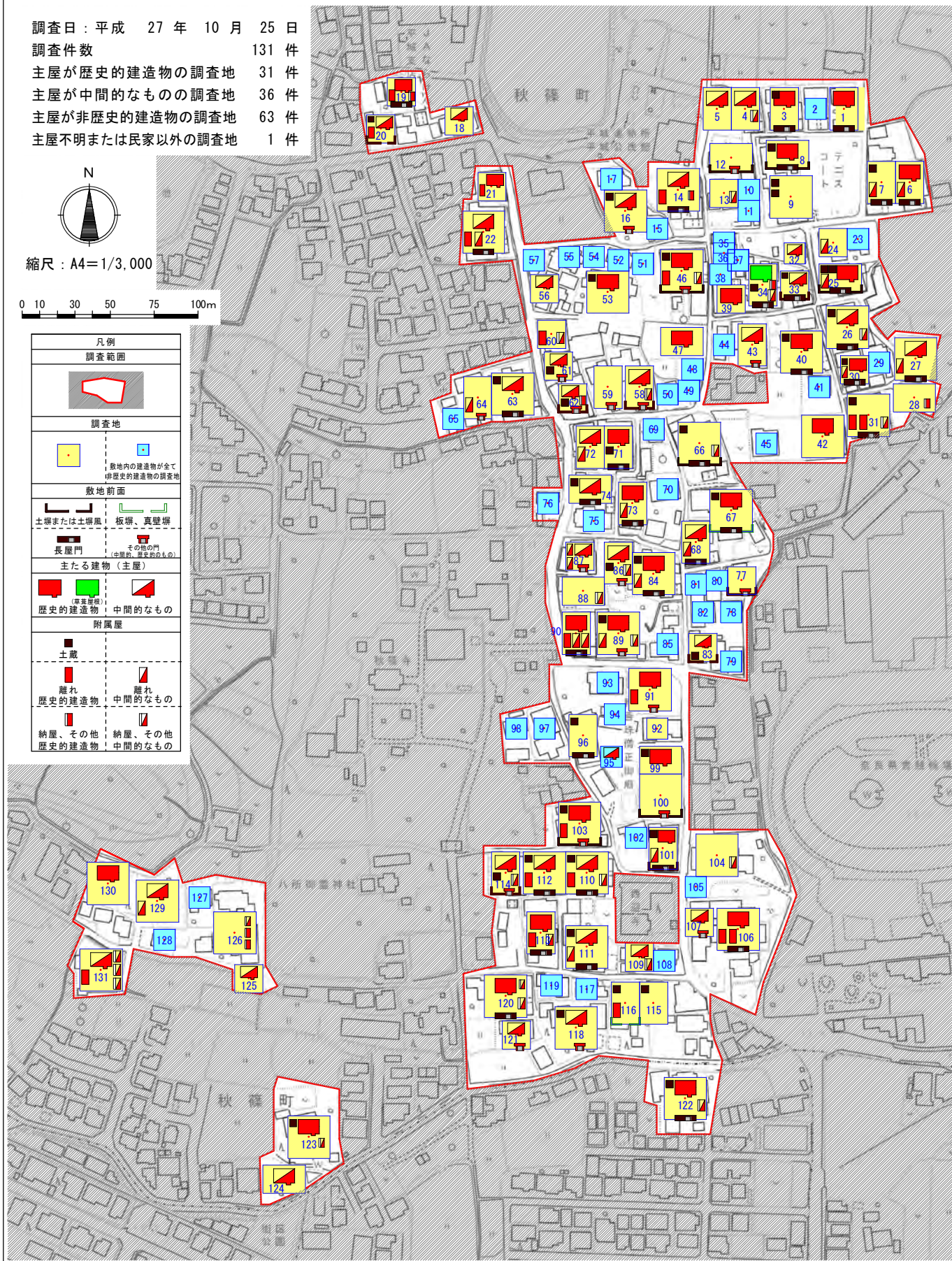
調査日：平成 27 年 10 月 25 日
 調査件数 131 件
 主屋が歴史的建造物の調査地 31 件
 主屋が中間的なものの調査地 36 件
 主屋が非歴史的建造物の調査地 63 件
 主屋不明または民家以外の調査地 1 件



縮尺：A4=1/3,000



凡例	
調査範囲	
調査地	
	敷地内の建造物が全て非歴史的建造物の調査地
敷地前面	
	土塀または土塀風 板塀、真壁塀
	長屋門 <small>その他の門 (土塀的、屋梁的のもの)</small>
主たる建物(主屋)	
	歴史的建造物 <small>(真壁塀)</small>
	中間的なもの
附属屋	
	土蔵
	離れ 歴史的建造物
	離れ 中間的なもの
	納屋、その他 歴史的建造物
	納屋、その他 中間的なもの



歌 姫

調査日 平成27年11月22日



路地のような細い道沿いに、年月を経た趣のある住宅が立ち並ぶ

1 一地区の特徴・考察

[景観・敷地]

- ・平城宮跡の北側に位置し、周囲に古墳や天皇陵が広がる。
- ・歌姫の集落の中を南北に通過する道は歌姫街道と言われ、奈良と京都を結ぶ奈良時代以前からある古道であり、集落の北寄りに位置する添御県坐神社は、延喜式神名帳にある古い神社である。
- ・現在、平城ニュータウンが北に造成されたため街道は車の往来も多く、景観も変わりつつあるが、当地区には、伝統的な農村集落の形態がよく残されている。比較的大きな農家住宅もみられる。
- ・歴史的風土保存区域、平城山風致地区に位置し、市街化調整区域である。

[主屋]

- ・歴史的建造物が39件、中間的なものが21件確認できた。
- ・歴史的建造物はそのほとんどが切妻屋根であり、約半分がつし二階の形状を見せている。
- ・煙出しをもつ家も歴史的建造物で20件と、約半数で見受けられ、この地区の景観を形作っている。
- ・煙出しは南面する主屋の東側にあるのが通例であるが、3件は西側にあった。土間と居室の位置が通常とは逆とみられ、西側の道路に面して門屋を構えることからきた間取りと考えられる。
- ・色ガラスを格子状にはめ込んだ窓をもつ屋敷や、式台がある家など、特徴的な意匠も町並に彩を加えているようだ。

[附属屋]

- ・農家住宅らしく、離れ、納屋のある家が多い。離れは、現代に建て替えられているものが多いが、納屋は、古くから使われているものがかかりある。
- ・蔵は22件の家にみられ、2棟ある家が4件、3棟ある家が2件と、複数の蔵を持つ家も確認できた。
- ・長屋門は歴史的建造物を主屋に持つ家の半分以上で見られる。
- ・敷地がこのような附属屋でコの字型に囲われた「囲い造」の形態が多く住宅で確認できた。

[その他の特徴・感想]

- ・古都法施行前の高度成長期に建てられた貸家が点在するが、現在は空家となっている様子もみられた。
- ・ため池が田園風景の中に点在している。稲作のための貴重な水資源だろうが、集落の中にも見てとれる。防火水槽ともなりえるからだろうか。歌姫には小規模な個人有の池が多いらしい。

2 地域の風景 町並み



建物写真 歌姫



主屋
 落棟の切妻屋根、煙出しがみられる。
 戦前の建物とみられるが、美しく手入れされている。



主屋
 すっきりと伸びた切妻屋根に煙出しがアクセントになっている。



屋根構成
 切妻、落棟、煙出し、下屋。



主屋
 片側切妻片側入母屋の屋根、つし二階部は黒漆喰塗り。



長屋門と主屋
 西側の道路に面して長屋門を構える。主屋は屋根西側に煙出しがある。



主屋
 式台は農村では珍しい。大正期の建物と思われるが、一階部は江戸の可能性も。この建物も西側に煙出しがある。

備考

建物写真 歌姫	
	
<p>街道沿いの屋敷 街道に東面して主屋が建つ。腰板張り、漆喰塗の塀の奥に、色ガラスをはめ込んだ格子窓がある。</p>	<p>街道沿いの屋敷 土蔵、長屋門、主屋と街道沿いに並ぶ。敷地の大きさがうかがえる。</p>
	
<p>本二階の主屋 築60年、建具にも古い時代の意匠がみとれる。</p>	<p>長屋門 主屋もそうだが、適切な時期にうまく手をいれている。</p>
	
<p>道沿いの農家 道からのプロポーシヨンの美しい建物である。</p>	<p>真壁塀 長屋門に続く、漆喰壁に腰板を張った塀。長い連続性が美しい。</p>
<p>備考</p>	

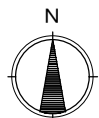
建物写真 歌姫	
	
<p>連続する土蔵 3つの土蔵が連なっている。たいそう立派な土蔵で、景観の一部となっている。</p>	<p>異蔵 長屋門に続く軒高の低い土蔵である。愛嬌のある姿である。</p>
	
<p>長い土蔵 街道沿いに建つ長く大きな土蔵である。</p>	<p>納屋 現在も納屋として活躍しているようだ。</p>
 	
<p>納屋 出入口が附属する。50年前に建て替えた際に、門屋に使っていた大戸を扉として再利用している。</p>	<p>ドテ小屋 厚い土壁を持つ小屋。農地の中ではなく、集落の中に残る。周りを囲う真壁から竹小舞が顔をのぞかせている。</p>
<p>備考</p>	

分布図

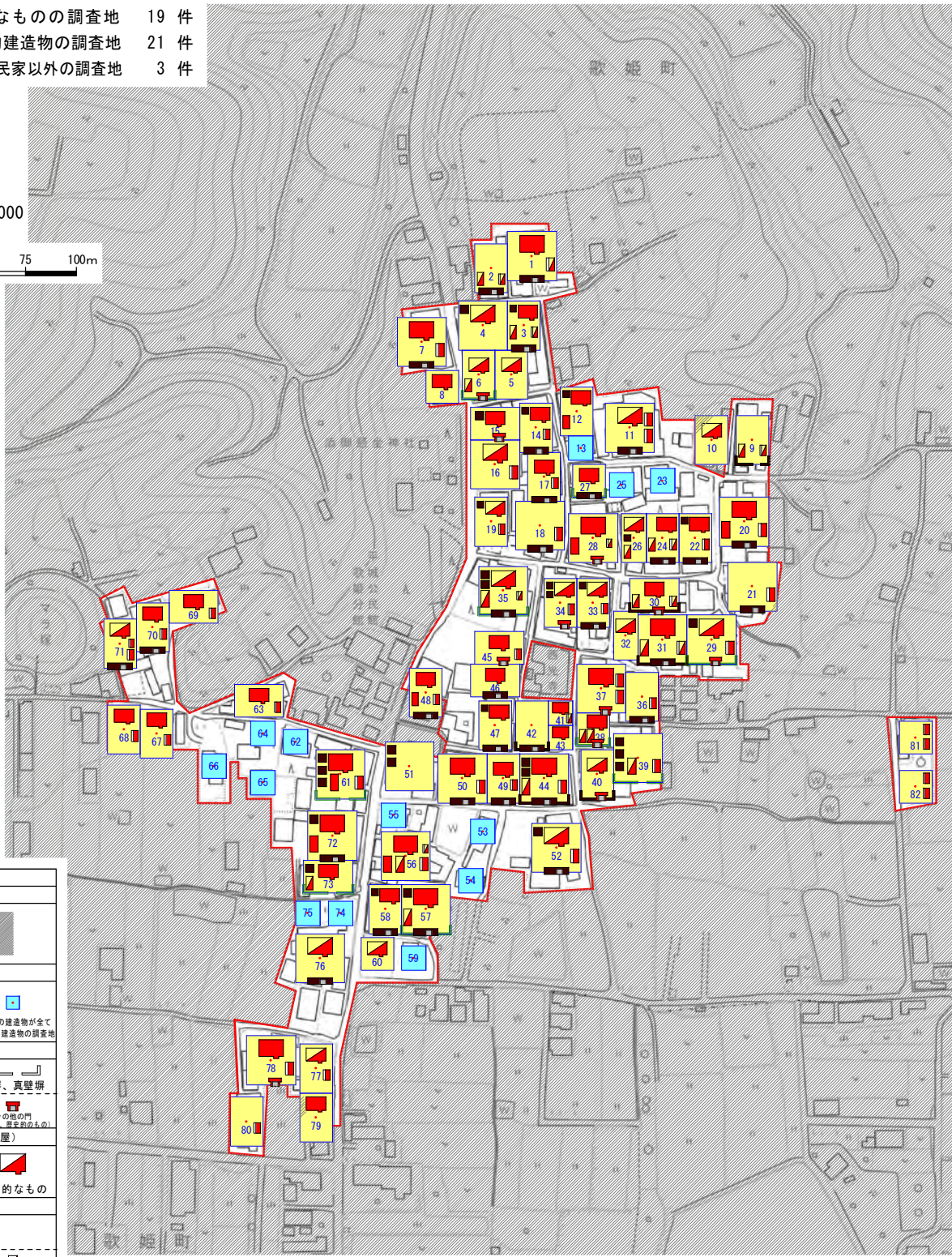
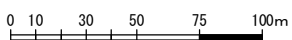
(地区名)

歌姫

調査日：平成 27 年 11 月 22 日
 調査件数 82 件
 主屋が歴史的建造物の調査地 39 件
 主屋が中間的なものの調査地 19 件
 主屋が非歴史的建造物の調査地 21 件
 主屋不明または民家以外の調査地 3 件



縮尺：A4=1/3,000



凡例	
調査範囲	
調査地	
	敷地内の建造物が全て非歴史的建造物の調査地
敷地前面	
	土塙または土塙風 板塙、真壁塙
	長屋門 (その他の門 (宗廟的、歴史館のもの))
主たる建物 (主屋)	
	(専ら歴史的)
	歴史的建造物
	中間的なもの
附属屋	
	土蔵
	離れ
	歴史的建造物
	中間的なもの
	納屋、その他
	歴史的建造物
	中間的なもの

報告会の記録

平成27年度・奈良市内における近世近代の歴史的建造物の掘り起こしによる地域活性化事業

平城地域歴史的建造物調査 報告会
 押熊・中山・山陵・秋篠・歌姫



日時 2016年3月20日(日曜日)
 PM1:30～PM4:00
 会場 おしくま会館 歌姫のまちなみ

◆プログラム◆

PM1:30～1:40	挨拶	奈良市教育委員会 山口 勇 (文化財課指定文化財係長)
PM1:40～1:50	調査の概要	米田 巧
PM1:50～2:40	「5地域の調査報告」 調査を行ったヘリテージマネージャーによる調査報告	押熊 米村博昭 中山 太田幸雄 山陵 中尾克治 秋篠 松村泰徳 歌姫 森本弓子
PM2:40～2:50	休憩	
PM2:50～3:50	「パネルディスカッション」 (コーディネーター) 奈良女子大学名誉教授 上野邦一氏 (登壇者) 米村博昭、太田幸雄、中尾克治、 松村泰徳、森本弓子	
PM3:50～4:00	挨拶	奈良県建築士会 見邨佳朗 (住まい・まちづくり委員会委員長)

上野邦一氏プロフィール

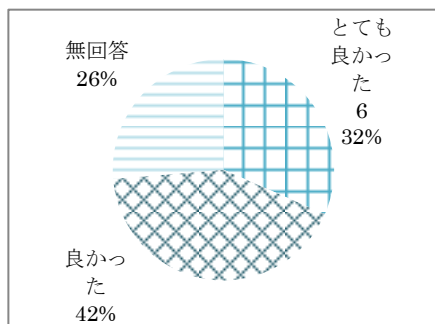
奈良女子大学名誉教授、工学博士。1944年生。名古屋大学卒業。専門は日本建築史、東南アジア建築史。1972年～1992 奈良国立文化財研究所で、古代宮殿・寺院の発掘調査、伝統的建造物の調査・研究に従事。1992年～2007 奈良女子大学教授として、町並み・民家をベースに教育と研究に携わる。1989年から現在まで、ラオス、カンボジア、ベトナム、ミャンマーにて遺跡の発掘調査・研究に関わる。2009年カンボジア王国サハメトリ勳章受章。現在奈良女子大学古代学術研究センター国際親善教授。著書:「宿場と本陣」、「なら・まち・みらい」、「描いて学ぶ」、「建物の痕跡をさぐる」など。

主催・(一社)奈良県建築士会 共催・奈良市教育委員会
 助成・平成27年度文化庁芸術振興費補助金
 (文化遺産を活かした地域活性化事業)

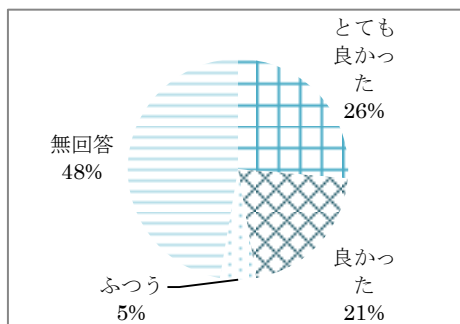


アンケート(来場者 30 人、回答数 19 人、回答率 63%)

① 5 地区の調査報告について



② パネルディカッションについて



アンケートでは「平城京の名前が残っている地域は歴史的に大切」「1300 年続く地域の現況に触れる機会ができた事に意義を感じる」といった意見が目立った。一方、「今後、空家が増えていく中で、どのように役立てるのか?」「保存をどのようにしたらよいか?」という質問もあった。

※とても良かった・良かった・ふつう・あまり良くなかった・良くなかった の5段階で評価

平成27年度文化遺産を活かした地域活性化事業
奈良市内における近世近代の歴史的建造物の掘り起こしによる地域活性化事業（平城地域）

調査員

(建築士会) 米村博昭 紀本澄男
徳本雅代 高安和秀
水下一力 太田幸雄
芝口健一 森本弓子
中尾勝治 松村泰徳
米田 巧 岡本光弘
岡田伸子 新堂宗孝
何左昌範 渡辺有佳子
安田千鶴子 中川幸一
植田清三 間嶋伸介
関川卓司 打集宣善
加藤安伸 小西直樹
北澤晨宏
(奈良市教育委員会) 山口 勇
高橋成美

報告書担当者

(建築士会) 米村博昭
太田幸雄
芝口健一
森本弓子
中尾勝治
松村泰徳
米田 巧
(奈良市教育委員会) 高橋成美

平成27年度 奈良市内における近世近代の
歴史的建造物の掘り起こしによる地域活性化事業

平城地域歴史的建造物調査報告書

2016年3月

発行 一般社団法人 奈良県建築士会

(住まいまちづくり委員会 奈良ヘリテージ支援センター)

〒630-8115 奈良市大宮町2丁目5-7 奈良県建築士会館

TEL 0742-30-3111

編集協力 奈良市教育委員会 文化財課

本書は、個人情報・プライバシー保護のため、奈良市教育委員会が報告書原本の一部を修正したものです。